



在宅ならではの 服薬管理の“虎の巻”

[評者] 川越博美 訪問看護 バリアン

在宅医療チームスタッフのための必携薬剤手帳！

松村真司，下田泰彦，山寺慎一

定価 2100 円(本体 2000 円+税 5%) 三輪書店 03-3816-7796



「病院では、どうしてこんなに多くの種類の薬が処方されるのだろう」「必要な薬をきちんと内服してもらうためには、どうしたらいいかしら」「こんなに厳しい血糖コントロールがこの人に必要なかしら」「もしかしたら薬の副作用かもしれない」などなど、訪問看護現場で、薬剤について悩んだ覚えがあると思います。

とくに筆者が専門とする在宅ホスピス緩和ケアでは、痛みなどの症状緩和のために、医師と協働で、麻薬やその他の薬剤をどのように内服してもらうかが訪問看護師の数ある役割のなかでも大きなものになっています。本書はその役割を果たす際に役立つ一冊です。

●在宅ならではの服薬管理のために

本書は、在宅医療を担っている医師3人によって、在宅医療でよく使われる薬剤を、①予防のための薬剤、②治療のための薬剤、③生活を支えるための薬剤の3種類に分類して、在宅医療に関わる医師だからこそそのポイントをついた解説がされています。それも簡便にいつでも携帯できるポケット版にまとめられていて、訪問看護師にとってはまさに「必携薬剤の虎の巻」的な一冊です。

在宅での医療は、病院の医療とは違い「生活する」ということを中心に医療を組み立てています。発想の転換が求められているのかもしれませんが。必要な薬剤を、いかに生活に合わせて内服できるようにするか？そのために病院での服薬管理とはまた違った方法が求められています。

●薬を媒介とした職種連携

著者は、在宅医療は生活を支えること、そしてチームでケアをすることという考えで服薬管理の方法を説明しています。医師や薬剤師、訪問看護師だけでなくケアに関わるすべての職種が、薬を媒介にしてコミュニケーションをとること(コミュニケーション力)が重要だとも述べています。

「医師は何のためにこの薬を処方したのだろうか」と考えて利用者に話す。「利用者が直接医師に聞きにくいときは、医師に確認して利用者が理解しやすいように伝える」「もしかしたらこれは薬の副作用かもしれない」「医師が処方した剤形では、飲みにくくなっている」と医師に伝える。訪問看護師にはまさに医師と利用者の橋渡しが求められていると言えるでしょう。

●在宅における服薬管理の「哲学」

本書では、薬剤の知識が得られるだけではなく、「よくある副作用」「薬の一包化の利点と注意点」「アドヒアランスに注目！——薬剤をきちんと内服してもらうために」「薬の管理は多職種でサポート」などの項目を立て、在宅医療での服薬の管理について具体的で参考になる解説がされています。

最後に記された著者からのメッセージは、本書が薬剤について解説しながら、在宅での服薬管理についての哲学(考え方)を教えてくれる書だということを伝えています。

- ① 薬剤は最終的な健康状態を改善することを通じ、生活を豊かにするために用いられる。
- ② 健康状態は生活するうえでは重要な要因だが、それがすべてではない。
- ③ 共に考え、共に悩みながら患者さんに関わろう。
- ④ 誰のために、何のために薬が処方されているか、考えることから始めよう。

本書を読んで、訪問看護師として、薬剤の知識の大切さと在宅ケアには哲学(考え方)が求められていることを再度確認することができました。